

# そして魔王は王子から相棒を取り戻す

作者：ノブノビタ

概要：ドイツ第三帝国が奇跡的に生き残った後の話です。スツーカーの魔王ことハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐とその相棒エルンスト・ガーデルマン軍医少佐のお話です。

194X年、第三帝国は滅亡の危機に陥っていた。

東からはソ連、西からは米国の二大物量チート国家との戦争が佳境に迫っていた。物資が底をつきかけ、第三帝国の敗北が濃厚になった時—あの男が立ち上がった。

「とりあえず、スターリンとルーズベルトに黒魔術で呪いをかけようか」

ハインリヒ・ヒムラーSS長官だ。

エロイームエッサイム×2と言いながらイビツな紋様の廻りをうろうろする変な髪型のオッサンは、それだけで見る者を恐怖のズンドコに突き落とした。

呼び出された悪魔（メフィストフェレス）はその異様な光景に耐え切れなかった。

メフィストフェレス「まじ、勘弁してください。。。」

ヒムラー「スターリンとルーズベルトを消してくれたら止めるぞ！エロイームエッサイム×2」

メフィストフェレスは仕方なく、デス・ノートにスターリンとルーズベルトの名前を書いた。その直後、スターリンとルーズベルトが心臓発作で倒れ一息を引き取った。

メフィストフェレス「ねえ、スターリンとルーズベルトは消したよ。お願い、もう止めて！」

ヒムラー「ソ連はこれで大丈夫だが、米国は軍の上層部が意外としっかりしていたな・・・それも全部消してくれ！エロイームエッサイム×2」

メフィストフェレスは泣きながら、アイクやキングを始め、米国の有能な軍人たちの名前もデス・ノートに書き記した。米国軍隊が機能停止した瞬間だった。

メフィストフェレス「ねえ、もういいでしょ！？それ以上やられると夢に出てくるから！？止めて！！」

ヒムラー「奴らが負けを認めたなら止める。エロイームエッサイム×2」

メフィストフェレス「ふわぁ～んっ！もう嫌だぁあっ！」

翌日、ソ連と米国が降伏してきた。

こうして、第三帝国は勝利し、ヒムラーの黒魔術も止まった。

結局メフィストフェレスはあの光景を一週間ほど夢にみるハメになった。

ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐は、後部機銃手で相棒のエルンスト・ガーデルマンとアルプス山脈最高峰のモンブランを登頂していた。

「大佐、あんまり早く行かないで下さいよ。あんた、義足なんだから。もう少しそのところよく考えて歩いてください」

前をあるくルーデルに、ガーデルマンは注意を促した。

大戦時に装着していた簡易義足ではなく、しっかりとした義足を装着しているとはいえ、それでもルーデルの足取りはガーデルマンのそれよりは不安定だった。

「ははっ！いいではないか、ガーデルマン。やはり標高が高いところの空気はいいものだな」

久しぶりに高いところへこれたためか、ルーデルの気分は高揚しているようだった。その証拠に、以前黄疸を患ったためガーデルマンのそれに比べると黄色い肌に朱がさしていた。

「ああ、やはり登山はいいな……。空に近づける……」

そう呟いて見上げたモンブランの空は、青く透き通っていた。

ルーデルは、そのあまりに突出しすぎた出撃数のため、独ソ戦終結後、半年の休みを強制的に言い渡された。

本当は溜まった休みは一年ばかりではなかったが、ルーデルが妥協した数字がそれだった。

ガーデルマンも同じく休みが溜まっており、彼の場合はちょうど半年分であった。

軍医であるガーデルマンはできるだけ留まってほしいという意見が多かったが、本人が、

「すみません……。ちょっと……。気分転換に軍を離れたいです……」

と若干げっそりした顔でいうので、仕方なく休みを取らせた。

ガーデルマンは、これでやっとルーデルの呪縛から逃れられる、と故郷ヴッパータールの実家で家族とのんびりしていた。

適度なマラソンを行い、シャワーを浴び、ビールとヴルストを食べ、ゆっくりとベッドで眠る。

そんな普通の日常がなんと尊く、幸福なことなのか……。ガーデルマンは身をもって味わっていた。

だが、そんな幸せな日々は1週間と続かなかった。（お決まりの文句だが）

ある朝、ガーデルマンは物凄いジェット音で目が覚めた。

「もう少し……」

聞きなれた轟音だったため、ガーデルマンはシーツを手繰り寄せ、さらに深い眠りへと潜り込もうとした。

だが、そこに違和感を感じた。

ここは、戦場ではない。なのに、何故この音が聞こえてくるのだ？

彼は慌ててベッドから這い上がり、近くにあったシャツに袖を通した。

近所の住人も戦時下ではないのにこの騒音は何事か、と外に出ていた。

ガーデルマンは空を見上げた。青い空に、一台の爆撃機が浮いているのを彼は認めた。

「まさか……」

彼がそうつぶやいた瞬間、その爆撃機—スツーカーJu87Gは“ジェリコのラッパ”と恐れられたサイレンを掻き鳴らし、急降下しだした。

周りの住人が慌てふためき逃げ出す中、ガーデルマンは絶望した。

奴が、きやがった、と。

スツーカーは爆撃することなく、広いガーデルマン宅の庭へと着陸した。

騒音が止み、このスツーカーの操縦者が現れた。

右足はガーデルマンのよく知る簡易義足ではなくしっかりとしたものに変更されていた。

リハビリが十分ではないのか、やや不安定な足取りのその男は、ガーデルマンを認めるやいつものあの人懐っこい笑顔を浮かべた。

「大佐、来るのなら車で来てくださいとあれほど言いましたよね……」

ガーデルマンは自分の上官—ハンス・ウルリッヒ・ルーデルに向かって呆れたような声で言った。

ルーデルは朗らかな笑い声をあげ、

「すまない。いつもの癖でついやってしまった」

深いため息をつき、ガーデルマンはルーデルの顔を見た。

大戦中はギラギラとしていた青い双眸が今は澄み切っていた。まるで空のように。それが、何故か嬉しかった。

最後に見たその顔は僅かにやつれていたが、会っていない1週間の間になんにも良い食事と十

分な休養を取ったようだ。彼が知るなかでは、今までで一番健康的な顔つきだった。医者として、健康的なルーデルを見れたことはうれしい。しかし、相棒としては、この常識外れの行動は、いかんせん頭に痛い。

だが、周囲の住人はスツーカーから降り立ったのが、かの有名な東部戦線の英雄・スツーカー大佐だと知るや否や彼のサインを求め始めた。

「む・・・ガーデルマン・・・」

ルーデルは困ったような顔で、ガーデルマンに助けを求めた。ガーデルマンは人の悪い笑みを浮かべ、

「派手な登場をする大佐がいけないんですよ。サインくらい答えてあげてください」  
そう言って、迷惑な客人をもてなす為の準備をした。

「で、何の用ですか？」

自分でいれた紅茶を啜りながら、ガーデルマンはルーデルに問うた。

ガーデルマンお手製のバームクウヘンを頼張りながらルーデルは、

「うむ。ほんはいはおはへとほはんひひこうほおもっへな・・・」

「はいはい。ちゃんと飲み込んでから離してください。そんな餌食ってるリスみたいに頼った膨らませないでください。押しますよ」

ごくりと飲み込み、出されたミルクを一口飲んでから、ルーデルは言った。

「実は、登山に行こうと思うんだが・・・」

「一人で行ってください」

バッサリと切り捨てるガーデルマンに、ルーデルは僅かに眉を寄せた。

「・・・つれないな。ガーデルマン」

「あんたに関わるととロクなことないんですよ。他の友達にあたってください」

紅茶を啜りながらそう返すと、ルーデルは自信満々に、

「お前以外に親友などいないぞ！ガーデルマン」

「何偉そうに言ってるんだ・・・この人は」

完全にガーデルマンは呆れていたが、ルーデルは気にしていない。バームクウヘンをフォークでつつきながら、

「ま、良いだろ。大体お前だってそろそろ体が鈍ってきたきたころじゃないか？」

「・・・」

「ほら、否定しないだろ」

そう言って、嬉しそうに一切れ、バームクウヘンを口の中に放り込む。

ガーデルマンは薄紅の紅茶の中に移った渋い表情の自分の顔を見た。

「これでも朝5時から2時間マラソンは行っているんですがね・・・」

「早朝のマラソンは心臓に悪いぞ。Dr.ガーデルマン」

ルーデルは、口の中に入っていたバームクウヘンを飲み込み、指摘した。ガーデルマンの眉間の皺が、僅かに深くなる。

「知ってますが、目が覚めてしまうんですよ。それに、なんか体が疼くんですよ・・・。動きたいって」

ルーデルは薄い笑みを浮かべ、

「そういうの、ナニ症候群というんだ」

「多分。ルーデル症候群ですよ」

ガーデルマンも笑みを浮かべた。

フォークを上下に動かしながら、ルーデルは提案した。

「学会で発表せねばならんか？」

ガーデルマンも冗談めかした声で言った。

「そうですね・・・。まじめに調べたら、発表できるかもしれないですね・・・」

にやりと笑みを浮かべ、

「よし、なら身をもって調査だ！」

ルーデルはそう言って勢いよく立ちあがり、

「まずは、モンブラン（4819.9メートル）からだ！」

黒みがかかった青い瞳でガーデルマンはルーデルを見上げた。その瞳には戦時中のように生き生きとしていた。

「いきなりヨーロッパ最高峰ですか。さすがは大佐ですね」

「だが、肩慣らしにはこれぐらいが丁度良いだろ？」

澄み切った青いルーデルの瞳が一瞬飢えた獣のそのように見えた。

ああ、この人は飢えている。ガーデルマンはルーデルの刹那の変貌に気がついた。平和を愛する男であることは、ガーデルマンもよく知っている。だが、それと同時に自分の生にどん欲な人間であることも、彼はよく理解していた。生きるか死ぬかの戦場でのみ味わうことができるあの瞬間を知ってしまったら、通常的生活など行えるはずがない。

家畜のようにただ生かされることを厭うルーデルをガーデルマンはよくわかっていた。

「わかりました」

ガーデルマンは、紅茶を飲み干し、言った。ルーデルが嬉しそうな顔をした。

「そう言ってくれると思ったよ。ガーデルマン。では早速—」

「ただし、」

ガーデルマンはルーデルの言葉をさえぎった。

ルーデルが、若干不安そうな顔をした。ここまで来て、止められるのではないか・・・という不安。それがありありと読めて、ガーデルマンは笑いたいのを必死で堪えた。

「私の作ったバームクウヘンとミルクはちゃんと間食してください。それから、登山の準備はしっかり行ってからにしましょう。4000メートル級とはいえ、舐めてかかると痛い目にあいますよ」

下界と違い、酸素の濃度が薄いモンブランの頂上。僅かに呼吸が辛い、下界では決して味わうことのできない清々しさがそこにはあった。

下を眺めると、綿飴状の雲が見えた。

登山病の心配があったが、ガーデルマンもルーデルも過呼吸になるでもなく、ここまで登ることができた。

「うまそうだな・・・ガーデルマン」

「ただの水蒸気の集まりですよ、大佐。飛び込んだらそのまま落ちていきますが、止めはしないのでよければどうぞ」

ガーデルマンは背負っていた登山用サックから水筒を出し、一口飲んだ。口元を拭いてから、ルーデルにそれを投げ渡す。

水がちゃんと入っていることを確認してから、ルーデルは水を飲んだ。

「む・・・もう空っぽだ・・・」

「それは行きようなんで、大丈夫ですよ。帰りの分は大佐のサックの中ですよ」

ガーデルマンは言って、ルーデルの隣に並び、下を見た。

「いつもこれぐらいの高さから急降下してたんですね。スツーカーに乗って見る景色とは・・・やはり違いますね」

「ま、これも悪くはないがな・・・」

言って、ルーデルとガーデルマンは顔を見合わせ、笑った。

「さて、暗くなる前に降りますか・・・」

そう言って、ガーデルマンはサックを背負いなおした。ルーデルは名残惜しそうに、振り返りもう一度だけ山頂からの眺めを見た。

僅かに霧が出てきたモンブランの頂上をゆっくりと下山していく。

ガーデルマンも体力に自信はあるが、ルーデルほどではない。

慣れない義足とはいえ、体力のあるルーデルはどんどんと前へと行く。

「ちょっと・・・大佐・・・待って・・・」

そこで、ガーデルマンの言葉は止まった。

誰かが、背後に回り込んだのにガーデルマンは気がついた。

咄嗟に振り返ろうとした。僅かに過呼吸気味になっていたため、反応が間に合わなかった。

「ーっ！！」

後頭部に正確に叩き込まれた手刀が、ガーデルマンの意識を奪った。

背の高いガーデルマンを黒い人影は受け止めた。

ガーデルマンの首筋に注射器の針が刺さる。

僅かにガーデルマンは眉をしかめた。脈を僅かに外して針を刺されたことに対する怒りと、何を注入されたかわからない不安が彼を襲った。

怒鳴りたいが、どうも即効性の麻酔のようだ。臉が急激に重くなった。

薄れる意識の中ガーデルマンは、自分をこのような目にあわせた犯人の顔を見た。

「・・・！！？」

黒みがかかった青い瞳が大きく見開いた。

そう、その男はあの「金髪の野獣」の部下だった・・・

「やあ。スツーカードクトル。上司の命令でね・・・。悪く思わんで下さいよ」  
ヴァルター・フリードリヒ・シェレンベルクSS少将は端正な顔を歪め嗤った。



～ベルリン・親衛隊本部～

いわゆる黒服を着ているSS軍人たちの中、私服姿のルーデルは浮いていた。

だが、その顔つきはどの軍人のそれよりも鬼気迫るものだった。

ルーデルは長官室のドアを足蹴もした。

派手な音を立てて開いたドアに、第三帝国きっての大魔術師でSS長官のハインリヒ・ヒムラーは驚いた顔でルーデルを見た。

魔王と陰で言われているルーデルはヒムラーを睨みつけた。

何故睨まれているのかよくわからないヒムラーは、チャームポイントの丸眼鏡を指で押し上げた。

「ルーデル大佐。ドアを開けるときはノックをしてからと相棒から教わらなかったか？」

「その相棒を拉致したのはどこの誰だ・・・？」

あまり聞くことのない低い声に、ヒムラーは怯んだ。

澄んだ空のようなルーデルの瞳が、今は憎悪のため暗く濁って見えた。

「・・・ガーデルマンの身に何かあったのか・・・？」

ヒムラーがそう問う。ルーデルは禍々しく口元を歪め、カツカツとヒムラーへと近づいた。

「冗談はよしてくださいよ。ヒムラー長官」

言って、ルーデルはヒムラーの襟首を掴んだ。ヒムラーは小さく悲鳴を上げた。僅かに体が宙を浮く。

「SSのFw190がガーデルマンを連れていくのを 俺 は見たんだ」

間近で見るルーデルの双眸が、恐ろしかった。

戦時中にもヒムラーは何度かルーデルと会ってはいたが、あのときですらこんな目はしていなかった。

「相手を殺すような視線」とは、まさにこのことを言うのだろうか、とヒムラーはぼんやりと考えた。

感情をそれなりにコントロールできる人間だと思っていたが、そうではなかった。

彼の相棒である、エルンスト・ガーデルマンがうまく彼を制御していたのだ。

2代目の相棒であるヘンツェルを失ったころから、ルーデルはやや不安定になっていた。

そんなルーデルを、親友のガーデルマンは支えていた。

ルーデルがどんな無茶をしても、ガーデルマンはそれにつき従った。（ただし、文句や苦言ももちろん呈していた。一応医者だし）

制御されていないルーデルの怒りが、まともにヒムラーへと向けられる。

恐怖で声がでなかった。ただでさえ襟首を掴まれて声が出にくいというのに、どうしたものだろうか。

周囲に目を向ける。

護衛の者たちも、この英雄の突然の暴行にどう対処すればいいのか困っていた。

力なく手を上げた。

部下が銃を構えた。

死なさない程度に・・・そう考え、ヒムラーは震える手をゆっくりと・・・

「おーい、ちょっといいか？」

ドアが開いた。一人の背の高い男が部屋の中に入ってきた。

茶色混じりの金髪をオールバックにし、左頬に大きな切り傷をもつ男—オットー=スコルツェニーSS大佐だ。

スコルツェニーは一瞬で事態を理解したようだ。

ニヨニヨと笑みを浮かべ、ヒムラーの部下に向かって言った。

「おい、そのままにしとけよ。面白いじゃないか」

彼らはどうすべきか、とヒムラーに視線を向けた。ヒムラーは力なくスコルツェニーを睨んだ。

はいはい、といった感じにスコルツェニーは頭をかいた。

ルーデルはヒムラーの襟首をつかんだまま、スコルツェニーを睨みつけた。

ヒムラーに向けられたそれと同じだが、スコルツェニーは一切怯まなかった。

それどころか、その視線を楽しんでいるようだった。

ヒムラーと違い、この間まで西部戦線の前線で敵から同じような視線に向けられていたスコルツェニーにとって、この視線はある種心地よいものだった。

「ルーデル大佐」

「なんだ、スコルツェニー大佐」

ヒムラーの襟首を掴む手にさらに力が込められた。

「ぐえっ」という悲鳴が聞こえてきたが、ルーデルはさらに力を加え続けた。

次は貴様の番だと言わんばかりの視線で、スコルツェニーを見る。

スコルツェニーは大きなため息をつき、

「あんたに、差出人不明の電報がきてる」

胸ポケットから華麗に電報を取り出した。

ルーデルの片眉が僅かに上がった。スコルツェニーは咳ばらいをし、

「Kommen Sie mit einem. .... zu hier in Gade Le Mans . . . 意味わかるか？」

「!？」

ヒムラーの襟首をルーデルは離した。スコルツェニーが持っていた紙切れをひったくり、まじまじと眺めた。

スコルツェニーはひらひらと手を振った。

「大佐じゃ読めねえだろ。俺んとこのコマンド部隊が頑張って解読しようとしたが、無理だったんだぜ」

そのほぼ意味をなしていない文字列をルーデルは何度も読み直した。

数十秒後、彼は口を開いた。

「ガーデルマンを返してほしくば . . . ここまで . . . 来い . . . 場所は . . . .」

スコルツェニーは愕然とした顔でルーデルを見た。

「えっ! ? なんてお前読めてるんだ! ! ?」

「ヒントはエキサイト先生だ」

ルーデルはそう言って、紙切れをスコルツェニーに投げ返し、部屋を出て行った。

鼻に突く臭いで、ガーデルマンは目を覚ました。

完全な目覚めではない。頭の中には靄がかかったままだ。

どうやら、睡眠薬のほうは切れたようだ。まだ麻酔のほうは効いている。体が全く動かない。

. . . 麻酔が切れていたとしても睡眠薬による気だるさで、常のように俊敏に動けないことは確かだろう。

しかもご丁寧に、足と手に枷が付けられている。

薄汚れてはいるが、冷たい床が気持ちよかった。

今頃大佐がどのようなことになっているのかを考えると、憂鬱だった。

大佐の名前が記載された空の水筒が、自分を乗せたFw190のコックピットのガラスを突き破ったのまでは覚えている。

どうも、あの大佐は自分が捕まったことには気が付いてくれたようだ。

どこに情報を求めにいったか知らないが . . . 暴れていないことを祈るしかない。

はぁ . . . とガーデルマンは一つため息をついた。

それにしても、ここは寒すぎる。

おそらく、派手に大佐は登場するのだろうか . . . .

そう思いながら、ガーデルマンはまた瞳を閉じた。

登山の疲れと静かな空間にいて降ってきた眠気。

どのみち、大佐が助けにきたならば、五月蝿くて寝てなどいられないのだから。

ルーデルは、指定された場所へとやってきた。

ベーメン・メーレン保護領のプラハ郊外にある病院跡。

ハンス・ウルリッヒ・ルーデルは伝説の鉄パイプを片手に、その廃墟と化した病院へと足を踏み入れた。

それは、まだ大戦中のある早朝のことだった。

宿舎からでたルーデルは、まばゆい朝日を浴びながら伸びをした。

今日も絶交の出撃日和だな、と満足そうに呟き、雲一つない晴天を仰いだ。

ふと、顔を地平にむけると、見慣れた人影がたっていた。

オールバックの黒髪に左頬に特徴的な傷がある背の高い男ルーデルの相棒・エルンスト・ガーデルマンだ。

ガーデルマンはルーデルには気付いていないようだ。一心に何かを振り回していた。

「何をしているんだ？ガーデルマン」

ルーデルはガーデルマンに近づき、尋ねた。声をかけられたガーデルマンは一瞬驚いたようだ。ルーデルの姿を認めるや、薄く微笑んだ。

「おはようございます。大佐。今日は絶好の出撃日和ですね」

額を伝う汗を拭いながら、そう返した。片手には何やら物騒な鉄パイプが握られていた。そろは片側が赤錆で汚れていた。

「ガーデルマン、それはなんだ？」

ルーデルは鉄パイプを指差した。ガーデルマンは、ちらっとそれを一瞥し、

「鉄パイプですよ」

「それは見ればわかる。何故お前がこんな朝早くに宿舎の前で鉄パイプを振り回しているのか聞いているんだ」

ルーデルは笑った。

「朝からその顔で鉄パイプを振っていると暴漢と間違われるぞ」

ガーデルマンは爽やかな笑顔で、

「顔は関係ないでしょう。それとも今ここで殴られたいんですか？」

そう返し、鉄パイプを掲げた。ルーデルは慌てて両手を振りながら後退った。

「あ、うん。冗談だ、ガーデルマン。頼むから振りかぶらないでくれ」

「冗談ですよ。冗談」

スッと鉄パイプを下ろした。

「冗談の割には目が本気だったぞ」

そう言うと、ガーデルマンは首を横に振った。

「む？隠せていなかったか」

ボソリと小声で呟いた。

「・・・」

ルーデルはあえて何も言わなかった。突っ込んだら負けだ。そんな気がした。

「で、どうしてそんなものを持っているんだ？」咳ばらいを一つし、ルーデルは話しを戻した。ガーデルマンは軽く鉄パイプを振るった。

「大佐は私がメンズーアの選手だったことはよくご存知ですよ」

「ああ。学生時代50戦無敗を誇ってたと前聞いた」

「まあ、最後はアレなんですけどね・・・」

「で、それがなんだ？」

「その時に使ってたのがコレなんです」

「・・・え？」

「メンズーアの時に使用していたのが、この鉄パイプなんです」

「ちょっと待て。メンズーアはフェンシングで戦うのではないか？」

「公式ではそうですが・・・私に絡んできた連中が殆ど不良ばかりで、フェンシングのレイピアなんて細いものではなかなか太刀打ちできなかったんですよ」

「で、鉄パイプ」

「意外と使い勝手が良いんですよ」

そう言って、ガーデルマンはルーデルから少し離れた。フェンシングの選手のように鉄パイプを構えた。ゆっくりと息を吸い込み、鋭く吐いた。

一歩踏み出し、素早く突きを繰り出す。ヒュンっと小気味よい音がした。

中々綺麗な突きだった。ルーデルは思わず相棒の繰り出した剣撃？に見惚れていた。

ガーデルマンはそこで鉄パイプを下ろした。

「これくらいにしましょう。今日も沢山出撃するのでしょうか。大佐」

汗を拭いながら、言った。

「私もあまり若くない。大佐の出撃と鉄パイプでの素振りを両方心行くまで行うことはできません。でも、素振りをすると・・・気が晴れるんですよ」

ふっとガーデルマンは笑みを浮かべた。

「誰かさんのせいで、これをやってないとストレスで心臓やられそうなんですよ」  
「なんか言ったか？」  
「別に大佐のことじゃないですよ」  
「む、そうか。ところで・・・その赤錆なんだが・・・まさか・・・」  
「ええ。お察しのとうり、返り血です」  
「!？」（ガクブル）

廃墟へと入ろうとしたルーデルの前に、二人の黒い軍服姿の男が現れた。  
「ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐か？」  
そう言って、一人の男がルーデルにピストルを突き付けた。  
ルーデルは素早く鉄パイプを振り下ろし、ピストルを叩き落とした。  
鉄パイプは男の手にもあたったようだ。  
骨が折れる小気味いい音がした。  
もう一人の男が、慌てて懐から銃を取り出そうとするのを見て、ルーデルは鉄パイプを横に屈  
いだ。  
鉄パイプは男の横腹クリーンヒットした。  
肋骨を砕いた感触が鉄パイプを通してルーデルに伝わった。  
肋骨が折れた男は、その衝撃で気を失ったようだ。  
手の甲を砕かれた男は、落ちたピストルを拾おうとしている。  
ルーデルはそれを見、屈んだ男の足に蹴りを入れた。  
義足での蹴りは、加減を知らない。  
男は呻き声をあげて倒れた。  
二人とも死んではいない。気絶したようだ。  
たとえ目が覚めても、当分起き上がることもできないだろう。  
ルーデルは、男たちの袖にSDと記された袖章を認めた。  
SD—正式名称・親衛隊情報部はヒムラー長官のSS内部に置かれた組織だ。  
その局長は、ルーデルの記憶が正しければ、ヴァルター・フリードリヒ・シェレンベルク。  
あの男の部下だった男だ。

「お目覚めはいかがかね、ガーデルマン軍医少佐」  
独特の甲高い早口が聞こえた。  
うとうとガーデルマンだが、その特徴的な口調で一気に目が覚めた。  
まだ思うように体は動かないが、どうにかして首だけを動かし声の主を見た。  
金髪とやや釣り上がった碧眼と自分よりもやや高い身長。  
写真などでよく見たことがある人物だ。  
「ハイドリヒ・・・ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ・・・」  
ガーデルマンはやや呂律の回らない口でその名を呼んだ。  
背の高い男—ハイドリヒはにやりと笑った。  
「ほう。さすがは優秀な男だな。ガーデルマン軍医少佐」  
だが、彼は1942年6月に殺されたのではないか？  
黒みがかかった青い瞳を大きく見開き、驚いているガーデルマンを見て、ハイドリヒの横に  
いたシェレンベルクが答えた。  
「42年に死んだのは、ダブルだ。ガーデルマン」  
なるほど・・・。  
ただで死ぬような男ではないと言われていたが、本当にそうだったとは・・・。  
だが、何故そんな男が自分を拉致したのだろうか？  
ハイドリヒは薄い笑みを顔面に張り付けたまま、ガーデルマンの傍へときた。  
ぐいっと髪を引っ張られ、無理やり視線を合わされた。  
間近で見たハイドリヒの瞳は、ぞっとするほど冷たかった。  
まるで、無機物でも見るかのような目立った。  
居心地が悪そうに、ガーデルマンがたじろぐ。それを見たハイドリヒがシェレンベルクに指示  
を出した。  
「薬が切れかけてきているぞ。すぐに打て」  
そう冷たく吐き捨て、ガーデルマンの髪を離した。  
シェレンベルクが注射器の準備をしているのが視界の端に見えた。  
医学を多少なりともかじっているため、薬の配分などは間違っていないようだが、いかんせん

注射の仕方が乱雑だ。

先ほどから首筋や左腕などに数回刺されており、鬱血の跡がくっきりと出ている。

左腕に注射器の針が刺さる。もう、痛みは感じない。

追加されたのは、麻酔のみのようだ。眠くはならなかった。

「何故貴様を捕まえたのかについては・・・大佐が来てから、ゆっくりと話してやろう」  
そう言って、ハイドリヒがにやりと笑い、倒れているガーデルマンの腹に蹴りを入れた。

「ぐうっ・・・！」

鈍い痛み、僅かにガーデルマンは呻いた。

遅行性の麻酔のようだ。未だに痛みを感じる。

だが、頑丈なこの男が気を失うには温かった。

「ああ、そういえばお前は丈夫だったんだな・・・」

乾いた笑い声を上げながら、ハイドリヒはガーデルマンを仰向けに、腹を踏みつけた。

「肋骨を3本折った後も、出撃をしたんだったな・・・」

ハイドリヒがガーデルマンを踏みつける足に力を込めた。

鍛えた腹筋の下の肋骨がみしっと悲鳴を上げた。

「う・・・あ・・・」

口元に張り付けた笑みをさらに禍々しいものにしながら、ハイドリヒは言った。

「麻酔が効くにはあと30分時間がかかる」

ガーデルマンは、どうにか口を開いた。

「大佐が・・・すぐ来るさ・・・」

そう言った時、部屋のドアが派手な音を立てて壊れた。

室内に入ってきたのは、返り血で赤く染まった鉄パイプを持ったパイロットスーツの—

「ルーデル・・・大佐・・・」

掠れた声で、ガーデルマンは名前を呼んだ。

パイロットスーツ姿のガーデルマンは、にやりと笑った。

「待たせたな、ガーデルマン」

8人目を殴りつけたところで、ルーデルは一度手を止めた。  
最後の一人以外は、みんな気を失っていた。  
ルーデルは肩を殴りつけた最後の一人をぐいっと掴んだ。ひいっと小さい声を漏らす。  
「おい。ガーデルマンはどこだ」  
暗い双眸。男は一瞬ひるんだが、すぐに挑戦的な声で、  
「SDの我々が素直に教えると、思うか？」  
「教えてくれるだろ？」  
ルーデルは禍々しい笑みを浮かべた。  
男は、たじろいだ。  
今日の前にいるこの魔王と自分の上司のバックにいる王子、どちらが恐ろしいかと言われたら・・・。  
「3階の・・・一番手前の部屋だ・・・」  
「そうか、ありがとう」  
そう言って、ルーデルは男の鳩尾に拳を叩き込んだ。  
男は小さく呻いて、気を失った。  
ルーデルが廃墟の病院に入って、数分後のことだった。

「はじめまして。ルーデル大佐」  
ハイドリヒはガーデルマンに銃をつきつけ、言った。  
「まずは、その凶器を置いてもらおうか」  
ガーデルマンを一瞥し、ルーデルは止まった。  
見る限り、麻酔や睡眠薬を投薬され続けていたようだ。  
袖を捲りあげられた左腕と首筋に注射針と鬱血の痕が見られた。  
ガーデルマンが動けるようならば、すぐさま自分に銃を向けているシェレンベルクを鉄パイプで殴りつけるところなのだが・・・。  
どうやら、今は大人しくしておいたほうが良いようだ。  
ルーデルは鉄パイプをその場に投げ捨てた。  
ルーデルはガーデルマンを真っ直ぐに見、頷いた。  
やや緊張した顔でガーデルマンも頷いた。  
ハイドリヒは特に気にしてはいないようだ。  
「本当はこんな手荒なことはしたくなかったのだが、君が素直に私の話しを聞いてくれるとはとても思えなくてね」  
ハイドリヒはそういって、ガーデルマンの腹を踏みつけた。低い呻き声。  
ルーデルが動こうとした時、こめかみに冷たい物が突き付けられた。  
「今はお話を聞きましょう。ルーデル大佐」  
口の端に薄い笑みを浮かべ、ルーデルのこめかみに拳銃を押し当てシェレンベルクは言った。  
ルーデルはため息を着いた。  
「3本までなら・・・大丈夫です・・・よ」  
途切れ途切れにガーデルマンが言った。  
ハイドリヒは冷酷な笑みを浮かべ、  
「健気な部下だな」  
ガーデルマンを踏み付ける足に力を込めた。  
ミシッという音と低い呻き声が静かな部屋に響く。  
ガーデルマンは歯を食いしばって堪えているが、苦鳴が漏れでていた。  
ルーデルはギリッと歯ぎしりをした。ハイドリヒはその様子を楽しんでいるようだった。  
「何、私の話しをちゃんと聞いてくれれば、こんな酷いことは止めるさ」  
「ならさっさと話せ」  
ルーデルはキツくハイドリヒを睨んだ。ハイドリヒはガーデルマンの腹を踏み付けながら話し出した。  
「今回の大戦についてルーデル大佐、君はどう考えている」  
「祖国が勝てたようで何よりです」  
「だが、戦争に勝った我が国はどうだ？以前より疲弊しているではないか」  
ハイドリヒはガーデルマンの腹を踏み付ける足に、更に力を込めた。  
一緒に憎しみも込めているようだった。  
ミシミシと音を立てるガーデルマンの肋骨。

食いしばって、ガーデルマンは堪えている。  
ルーデルは、早くガーデルマンを助けたい一心だった。  
あまり、ハイドリヒの話は聞いていない。  
それを悟ったのか、シェレンベルクがこめかみに押しあてた拳銃をぐいっと押した。  
「しっかりとハイドリヒ長官の話を聞け」  
ルーデルは横目でシェレンベルクを睨んだ。  
僅かにシェレンベルクは怯んだが、やはり先ほどの黒服とは違う。  
「その目はなんだ・・・！」  
さらに拳銃をぐいっと押しつけた。自分が有利な立場にあることをよくわかっているようだ。  
変なところで賢いな。ルーデルはため息をついた。  
ハイドリヒは咳ばらいをし、続けた。  
「それもこれも、誰のせいだかわかるかな。ルーデル大佐」  
「さあ、政治には興味のない私にはさっぱりわかりませんね」  
さっぱりと答えたルーデルに対し、ハイドリヒはさらに禍々しく嗤った。  
ああ、肋骨が一本折れたな・・・。  
ごきっという鈍い音がし、ガーデルマンは苦しげに息を吐いた。  
「全部あの老いぼれのせいだ」  
ハイドリヒは、今までの楽しげな態度を一変させ、怒りを露わに言った。  
「あの老いぼれ・・・アドルフ・ヒトラーが、しくじったせいだ」  
「あまり相当閣下について悪くいわないでもらいたい」  
ハイドリヒの言葉に、ルーデル毅然と反論した。  
「あの人は、私の作戦にも耳を傾けてくださった。家族に対しても厚く優遇してくださった」  
「それは、貴様が我が国の英雄だからだ」  
ハイドリヒは冷たく言い放った。  
「私はあの老いぼれを葬るつもりだ。安定していない今の政府を転覆させ、私がこの国を建て直す」  
ごきっとまた鈍い音がした。  
ガーデルマンの肋骨がさらにもう一本折れた。  
ハイドリヒは、はっきりとルーデルに言った。  
「その過程で、貴様とこの相棒の力が借りたい」  
しんと場が静まり返った。  
ルーデルは、自分が怒りで震えていることに気がついた。  
この男は、そんなことを言うためにガーデルマンを拉致したのか。  
今、自分が怒りをうまく制御できるのか、わからなかった。  
「断る・・・」  
ハイドリヒは眉を上げた。  
「何？」  
怒りの為、いつもより暗い青の瞳が、まっすぐにハイドリヒを睨みつけた。  
「断る。戦争で弱った国をさらに衰弱させるような行為に、加担することなどできない」  
一瞬、ハイドリヒは驚いたような眼をした。  
だが、すぐにいつもの冷酷な瞳に戻った。  
「フッフッフ。そうか・・・そうきたか・・・」  
ガーデルマンから足をどけた。ようやく腹を圧迫していたものがどき、ガーデルマンはほっとしたようだった。  
ハイドリヒは、麻酔で自由にならないガーデルマンの体をぐいっと立たせた。  
ふらつくガーデルマンを壁に押さえつけ、懐から取り出した小瓶を見せつけた。  
ガーデルマンはその小瓶に書かれた文字を読んで、目を見開いた。  
「医者なら、わかるだろ？」  
そう言って、小瓶の中に入っている液体をガーデルマンの口に流し込んだ。  
それを吐きだそうとするガーデルマンの口と鼻をハイドリヒは押さえつけ、膝で腹をけり上げた。  
驚いたガーデルマンは、口の中の液体を、飲み込んだ。  
「ガーデルマンっ！！」  
ルーデルは慌てた。  
「動くなっ！！」  
シェレンベルクが叫ぶ。

ガーデルマンは膝をつき、今飲まされたものを吐きだそうとした。

ハイドリヒの乾いた笑い声を上げ、小瓶を投げ捨てた。

「遅行性の毒薬だ。解毒剤は私が持っている。相棒を助けたいのなら、私の言うことを聞くことだ。ルーデル大佐」

「解毒剤は、これだ」

ハイドリヒはそう言って、懐からまた別の小瓶を出し、それをルーデルに見せつけた。

無色透明な液体が無機的な蛍光灯の光を受け、チラチラと揺らめいていた。

ガーデルマンは喘いだ。どうも麻酔が効き始めたようだ。うまく体が動かない。

それを見て、ルーデルは悟った。

ガーデルマンを助けるには、あの解毒剤しかない、と。

「放っておけばこの毒薬は、6時間の内にこの男の命を奪うだろう」

冷たい声が室内に響いた。

毒を吐きだそうとするガーデルマンをハイドリヒは蹴りあげた。

「さて・・・どうする？ハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐」

ルーデルはギリッと歯ぎしりをした。

シェレンベルクは相変わらずルーデルに銃を突きつけている。

ふと、ルーデルはシェレンベルクの経歴を思い出した。

確か、この男は前線にでて戦ったことはなかったはずだ・・・。

一か罰かだ。

額に汗が浮き出るが、拭っている暇などない。

ルーデルは床に置いた鉄パイプをすばやく拾った。

「貴様っ！」

シェレンベルクが握った拳銃の引き金を二度引いた。

しかし、静止している標的を撃つ練習はしたが、動いている人間を撃つことがなかったシェ

レンベルクは、見事に的を外した。

二発の銃弾は、ルーデルの背後を通り過ぎた。

拾った鉄パイプでルーデルはシェレンベルクの左足をなぎ払った。

「うわっ！」

シェレンベルクは体制を崩した。引き金に指が引っ掛かっていたようだ。さらに2発が喧しい音

を立てて天井に穴をあける。

ルーデルが標的をシェレンベルクからハイドリヒに変えようとした時だ。

さらに二発、轟音が室内に響いた。

「ーっ！！」

ハイドリヒが発砲した銃弾は、見事にルーデルの左太腿を貫いた。

ルーデルはぐっと歯を食いしばり、ハイドリヒに向かって鉄パイプを振り下ろした。

ふんっと小馬鹿にしたような笑みをもらし、ハイドリヒは優雅にルーデルの一撃を右に避けた

。

鉄パイプを左にすばやく持ちかえ、ルーデルはハイドリヒを尻払おうとした。

ルーデルの左肩から血が噴き出す。

左肩を撃たれた。

次に、右肩も撃たれた。

鉄パイプが、乾いた音を立てて床に落ちた。

「これで、鉄パイプは振るえないぞ。ルーデル大佐」

ハイドリヒは、ルーデルの額に拳銃を押しつけ、言った。

発砲したばかりでまだ熱い銃口。じゅっと皮膚が焼ける音がした。

「私に服従しないのであれば・・・君も、相棒もここで死ぬことになるぞ」

ルーデルは、悔しげに眼を細めた。が、次の瞬間、その目が見開いた。

ハイドリヒも何かに気がついたようだが、咄嗟の出来事で間に合わなかった。

「ぐうっ！！」

ハイドリヒの右肩を、ガーデルマンが殴りつけたのだ。

弾みで、手から拳銃が落ちる。

ルーデルは床に落ちた拳銃を拾い上げ、すぐさまハイドリヒに突き付けた。

残りの弾丸は、二発。

ルーデルに気を取られていたハイドリヒは、ガーデルマンが落ちていた鉄パイプを拾っているのに気がつかなかった。

完全に麻酔が効いていたガーデルマンだが、他の何かが彼の体を突き動かしていた。

ある、有名な映画の一説でこんな言葉がある。

「怒りは、絶望にも勝る」と。

「貴様・・・大佐になんてことしてくれやがったんだ・・・」

ガーデルマンは、鉄パイプを斜めに構え、気だるげな声で言った。

オールバックだった髪が完全に乱れ、鉄パイプを持ったガーデルマンは、完全にアレだった。

「ふ．．．ふふっ．．．」

ハイドリヒは解毒剤をガーデルマンとルーデルに見せつけるようにかざした。

「確かに、貴様らは今武器を持っているが．．．良いのか？私を攻撃すると、こいつを落としてしまう可能性が高いぞ？」

ルーデルの瞳が僅かに揺らいだ。しかし、ガーデルマンの黒みがかった青い瞳はじっとりとハイドリヒを睨みつけていた。

「大佐。どうもつけられていたみたいですよ」

ガーデルマンは静かに言った。

ブーツを履いた誰かが廊下を走る音が聞こえた。

ハイドリヒは舌打ちをした。

「どうやら、ここまでのようだな」

そう言って、解毒剤の入った小瓶を投げ捨てた。

焦ったルーデルが、床に落ちる寸前の小瓶を、ギリギリのところでキャッチした。

ガーデルマンはハイドリヒにもう一撃加えようと、一歩踏み込んだ。

バンッ

「私を．．．忘れていたようだな！軍医少佐！！」

シェレンベルクがそう怒鳴った。

ガーデルマンの左脇に、弾丸が命中した。

歯を食いしばってガーデルマンは耐え、鉄パイプを振り下ろしたが、ハイドリヒはそれをひらりとかわした。

「シェレンベルク！退くぞ！」

ハイドリヒはそう怒鳴り、部屋を出た。シェレンベルクが慌ててその後に続いて部屋を出て行った。

緊張の糸が、解けた。

ガーデルマンは、その場に倒れこんだ。

「ガーデルマン！！」

ルーデルが駆け寄る。ガーデルマンは心配をかけまいと、薄い笑みを浮かべた。

「大丈夫ですよ．．．。とりあえず、解毒剤をください．．．」

ルーデルは頷き、ガーデルマンの上体をゆっくりと起こした。小瓶の蓋を開け、飲ませようとしたが、

「さすがに自分で飲みます」

そう言って、ガーデルマンはルーデルから小瓶をひったくり、それを一気に飲み干した。

ふうっと息を吐き、笑った。

「もう大丈夫ですよ」

それを見て、ルーデルもほっとしたようだ。

騒がしい音を立てて、ドアが開いた。

「おいっ！無事か！！」

部屋に入ってきたのは、SS上級大将のヨーゼフ・ディートリッヒことパパ・ゼップとスコルツェニーだった。

スコルツェニーは部屋に入り、二人の状態に眉を寄せた。

ディートリッヒは周囲を見渡し、ある人物を取り逃がしたことに對して、

「あの雌豚逃げやがったな．．．」

と悪態を付いた。

「ひでえ有様だな．．．」

スコルツェニーは言って、煙草を啣えて笑った。

ルーデルは両肩と左足を、ガーデルマンは左脇腹を撃たれていた。

「だが、生きています」

そう言って、ルーデルは笑った。

スコルツェニーが連れてきた医者がルーデルの治療をしようとしたが、ガーデルマンが先に動いた。

「包帯、かりますよ」

そう言って、適切な止血を施した後、ガーデルマンはふっとほほ笑んだ。

「助けていただいて、ありがとうございました」  
そう言って、ガーデルマンは気を失い、倒れた。

継続的な麻酔投与により、ガーデルマンはずいぶん衰弱していた。だが、3日病院で安静にした結果、以前と同じくらいには回復した。撃たれた脇腹の傷もそう大したものではなかった。ルーデルは、いつも通りだった。左太腿の銃弾は貫通、両肩は僅かに掠った程度だった。3発も撃たれたため、検査入院を言い渡された。が即効で無視し、ガーデルマンが寝ている病室へと向かった。

自分のお見舞い用にと総統がよこしてくれたフルーツの入ったかごを持って入ってきたルーデルに、ガーデルマンは読んでいた本を置き、ため息をついた。

「なんですか。そのフルーツは」

「む、お前と食べようと思ってな」

「どうやって？」

「皮を剥いて」

「誰が剥くんです？私はいやですよ。怪我してるんで」

「・・・」

「なんですか、その顔は」

「な、ならこのミカンなら・・・いいか？」

そう言って、ルーデルはオレンジ入りの球体を取り出した。

ガーデルマンの知る限り、その果物はオレンジに似ていた。

オレンジよりは一回りほど小さそうだ。

「ミカン？オレンジの一種みたいなもんですか？」

「うむ。簡単に手で剥くことができるんだ。日本でよく食べられているらしい」

ガーデルマンは少しだけ考えた後、

「・・・まあ、そういうものなら良いでしょう」

ルーデルの顔がぱあっと明るくなった。いつもの満面の笑み。それを見て、ガーデルマンの硬い表情も僅かに和らいだ。

「よし」

そう言って、ルーデルはかごからミカンを一個とり、ガーデルマンに投げ渡した。

ガーデルマンは投げられたミカンを受け取り、

「で、どうやって剥くんです？」

ルーデルはベッドの近くの椅子に座った。

果物かごからミカンをもう一つとり、ヘタの丁度反対側にある凹みをぐっと爪で押し、皮をむき始めた。

「こうやって剥くらしいぞ」

「へえ・・・」

ガーデルマンも、ミカンを剥き始めた。思ったよりも簡単に向けたようで、驚いていた。

「オレンジより皮が柔らかいんですね」

「うむ。この中の薄皮も食べれるらしいぞ」

そう言って、ルーデルは一房食べた。甘酸っぱい匂いが病室内に漂った。

「この白い筋は取ったほうがいいんですか？」

「いや、栄養がたくさん入っているから、もさもさするが、食べたほうがいいらしいぞ」

「へえ・・・」

白い筋をやや気にしつつ、ガーデルマンも一房ミカンを口に入れた。

「・・・うん。甘くておいしいですね」

そう感想を言い、微笑んだ。ルーデルも笑い返し。

「だろ」

そう言って、半分を一気に口に放り込んだ。ガーデルマンは若干呆れながら

「もう少し味わって食べたらどうですか。あまりドイツでは食べられないものなのでは？」

「む。だがいっぱい入っているぞ」

ごそごそとかごから新しいミカンを取り出しながらルーデルは言った。

「そういう問題じゃないでしょ」

ガーデルマンはため息をつきながら、また一房食べた。

結局、ガーデルマンが一つのみカンを食べ終わる前に、ルーデルは3つのミカンを食べた。

禁煙の病院にあまり行きたがらないスコルツェニーの代わりに、ディートリッヒが見舞いに

来た。

ゲルマン人らしい彫りの深い顔立ちが特徴的な男だ。  
少し変わった制服の着方をしているが、二人とも何も言わなかった。

SSはこういう制服なんだなあ、位にしか考えていなかった。

「おう。ルーデル大佐。ここにいたか」

花束をルーデルに投げ渡し、ディートリッヒは近くにあった病室の椅子にどかっと座った。

ルーデルは軽く会釈をした。

「あの時はどうもありがとうございました」

礼を言われ、ディートリッヒは手をひらひらと振った。

「例ならスコルツェニーに言え。あいつがお前さんに最新型の小型盗聴器を付けたお陰だ」

そう言って、ポケットからボタンほどの大きさの機械を取り出した。

「こいつは最近開発されたものだ。まだ試験機関中で、正式な運営はできてないが・・・まあ、今回の一軒で、十分に役に立つてこたあわかった」

ディートリッヒはそう言って、またそれポケットにしまった。

「コマンド部隊に今後は優先的に配布することになるだろうな」

ルーデルはすっとまっすぐにディートリッヒを見た。

「今回のこと・・・ディートリッヒ上級大将はどこでお知りになったのですか？」

ディートリッヒはまた手をひらひらと振った。

「パパ・ゼップでいいぜ。そんな堅苦しいのは好きじゃねえ」

言って、人懐っこい笑顔を見せた。

その笑顔を見て、この上級大将が将兵に慕われる理由がルーデルとガーデルマンには分かった。

裏表のない性格なのだ。このヨーゼフ・“ゼップ”・ディートリッヒという男は。（地図は読めないが）

「では、パパ・ゼップ。今回の一軒は、どこでお知りになったのですか？」

「知るも何も、大体のコトが起きてから・・・だな」

そう言って、一枚の紙切れを取り出した。

ルーデルはそれに見覚えがあった。

「ガーデルマン軍医少佐が連れ去られた後、この紙切れが送られてきた。こいつによって大体のことは把握できたが・・・」

ディートリッヒはちらりとルーデルを見た。

「なあ、ルーデル。確かにこれはエキサイト語だったが・・・よく、お前一瞬で読めたな」

「大佐はニュータイプですからそれくらい朝飯前なんですよ」

ルーデルの代わりにガーデルマンがすっぱり答えた。

ディートリッヒは眉をしかめ。

「いや、確かに言われた通りエキサイト辞書を見ながら翻訳したが・・・『1とともに来てください。.....ガーデルマンのここに』・・・意味わかんなくね？」

「・・・」

「・・・」

ルーデルとガーデルマンは黙りこくった。

ディートリッヒはその二人の表情が可笑しかったようだ。くつくつと喉を鳴らし、笑った。

「ま、スコルツェニーが慌ててお前の背中に盗聴器をくっつけてたから場所はわかったぜ。独り言で、『ベーメン・メーレン保護領のプラハ郊外にある病院跡』って呟いたからだけだな」

「本当に良かったですよ」

ガーデルマンはじろっとルーデルを見た。

ルーデルは居心地悪そうな顔をした。

ディートリッヒはそれを見てまた笑った。

「ま、お前らは大変だったが、今回の事件であいつ・・・ラインハルト・ハイドリヒが生きてたってことが十分にわかった」

緊張した面持に戻し、ディートリッヒは言った。

「あの雌豚は総統閣下に対する忠誠心なんざ少しも持ち合わせちゃいねえ。国が傾き始めている今が好機だと思ったんだろう。動き始めやがった。手始めに、優秀な軍人を自分の側に引き込もうとしたんだろう。たとえば・・・あんたらコンビとか・・・な」

そう言って、二人を指差した。

若干、ガーデルマンの表情が険しくなったのは、指差されたためであるが、それに気付いたのはルーデルだけだった。

「今回、俺たちSSは、雌豚（ハイドリヒ）を取り逃がした。おそらくSD局長のシェレンベルクが匿ってるんだろうが・・・まだはっきりとした証拠がないから、奴を抑えることもできねえ」

ディートリッヒは、ため息をついた。

「毒薬を飲まされたってことは、お前たちのことは諦めているみたいだが・・・念には念をいれねえとな。お前らの休暇は取り消した」

そう言われた瞬間、ルーデルの顔はばぁっと明るくなった。

一方のガーデルマンの顔は、絶望のあまり開いた口がふさがらなくなっていた。

「まだゲーリングと調整中だが、時期に正式命令がでるだろうな」

言って、ディートリッヒは席をたった。

「まァ、まずは怪我を治せよ〜」

そう言って、部屋を出た。

「よく、助けに来ましたね。しかも、一人で」

静かになった部屋で、ガーデルマンがぼつりと言った。

ルーデルは、バナナの皮をむいて食べていた。

「助けに来ていただけたのは、嬉しかったんですが・・・SSや国防軍ぐらいには知らせておいてほしかったですね・・・」

ガーデルマンの言葉にルーデルは眉をしかめた。

「む・・・。そうは言うが、あのSSのFw190を見た後だと、SSは信用できなかったし・・・何より、あの紙切れに一人で来いと書いてあった」

ルーデルは食べ終わったバナナの皮をゴミ箱に捨てた。

「まァ・・・そうなんですが・・・」

ガーデルマンは黒みがかかった青い目をまっすぐにルーデルに向けた。

「・・・あなたの命は、すであなた一人のものではない。軽率な行動は、控えてください」

「む・・・」

ルーデルは顔をしかめた。何か言い訳に困っているような表情だった。

その表情を見て、ガーデルマンはふっと笑った。

「ま、私が言ったところで、ムダなんだろうがね・・・」

ルーデルはそれを聞き、嬉しそうな顔をした。

「わかっているじゃないか。ガーデルマン」

言って、ルーデルはガーデルマンの目の前に手を差し出した。

「なに、私が危ないときは、ちゃんとお前が守れば良いさ」

ガーデルマンはふっと笑った。

「了解しました。大佐の背は、私が守りますよ」

そう言って、差し出された手を、固く握りしめた。